梅窓院通信『青山』
発行／梅窓院　編集／青山文化村
発行日／平成15年1月1日
発行人／中島 真成
住所／〒107-0062 東京都港区南青山2-26-38
電話／03-3404-8447　FAX／03-3404-8107
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ／http://www.baisouin.or.jp/
E-Mail／jodo@baisouin.or.jp

青山 AOYAMA

新年号
No.11
2003/01/01

題字／浄土門主総本山知恩院門跡
第八十六世中村康隆猊下

頌春

梅窓院二十五世
中島真成

新年明けましておめでとうございます。皆さんお元気で新しい年をお迎えになられたことと思います。

さて、梅窓院のこの一年ですが、悲願の新本堂も完成いたしますし、以前にお知らせしました墓地工事も終わります。また今年の十一月には新たに十夜法要を催す予定でもあります。

梅窓院の檀信徒の皆さんにとっても、おそらく関心の深いことが一段落する年になるかと思います。

本堂復興ですが、六月には新本堂が完成いたします。ですが、内陣のしつらえに半年ほどかかりますので、すぐには法要には使えません。皆さんにはご不便をおかけしますが、しばらくは観音堂を本堂代わりにさせていただきます。また、お寺で本堂などを建立した時に落慶式という記念式典を行いますが、梅窓院では来年の四、五月頃に行う予定です。

また、近隣にご迷惑をかけていた墓苑の排水ですが、整備工事が六月に終わり、また、平行して行っている舗装工事も順調で、よりお参りしやすいお墓になると思います。

十一月に予定している十夜法要ですが、浄土宗のお寺ではお施餓鬼と並ぶ大きな法要で、室町時代の仏恩感謝の十日念仏がその元で、五穀豊穣を祈念する法要でもあります。

さて、昨年のブラジル団体参拝の報告ですが、ブラジルには驚くほど色々な民族と宗教があります。その中で仏教、なかでも浄土教はわかりやすい教えとして最も信頼されている宗教です。ですからサンパウロにある浄土宗寺院の日伯寺では、新しくブラジル人のためにポルトガル語で布教するお寺を建てる話がすすめられています。

世界が物騒になる一方ですが、私たちは心静かに念仏が称えられる一年にしたいものです。

最後になりましたが、皆さんが良い一年を迎えられることを祈念し、新年の挨拶とさせていただきます。

平成十五年度 仏教行事予定

念仏と法話の会
二月二十六日（水）

春彼岸法要会
三月二十一日（金）

おはなまつり
四月五日（土）～八日（水）

長野善光寺団体参拝
五月十六日（金）～十七（土）

盂蘭盆会法要
七月十三日（日）

施餓鬼会大法要
七月二十一日（月）

秋彼岸法要会
九月二十三日（火）

お十夜法要
十一月十五日（土）

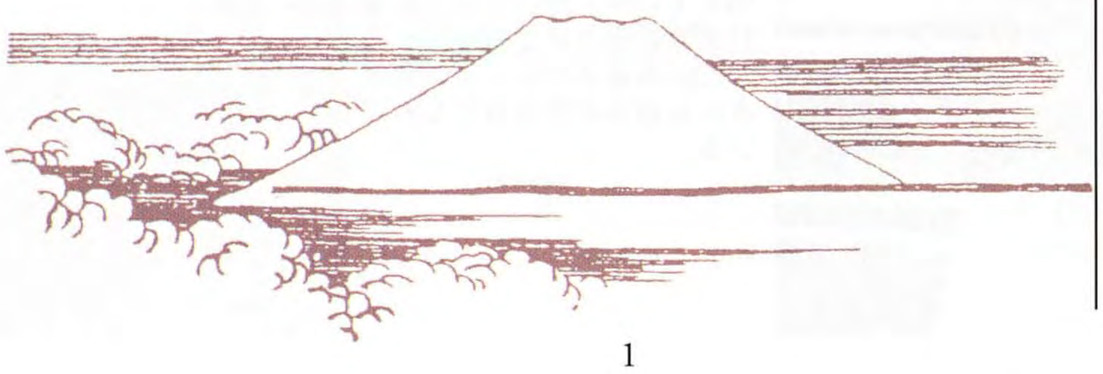
梅窓院通信

初夢

「一富士　二鷹　三茄子」初夢の定番といえばこの三つ。富士は末広がりの形から「商売繁盛」、鷹は高く舞うことから「運気上昇」、茄子は毛がない（怪我無い）ことから「家内安全」。これが、いくつかあるいわれの一つだそうです。

ところでこの一富士二鷹三茄子のルーツは？となると、駒込説が有力のようです。古川柳「駒込は一富士二鷹三茄子」がその根拠で、富士講の拠点となった富士神社、鷹匠組と彫られた天祖神社の石柱、江戸時代に盛んだった駒込ナスと、きれいに揃っています。

さて、皆さんの初夢は何でしたか？



「青山」梅窓院史

《真哉上人と梅真会》

その十

昭和四十八年、総本山知恩院での璽書道場で修行を終えた真哉上人（中央）。

梅窓院の中興の祖ともいえる中島真孝上人の後を継いだのが、その長男の真哉上人だった。

真哉上人は大正十一年十月、高崎の安國寺で生まれた。姉である君子さんと二つ違いで、後継ぎとなる男の子だった。

高崎の安國寺は現在、京都清浄華院のご法主である

台下がその法灯を継がれたが、梅窓院に入る前の真孝上人から受け継ぐ形だった。

当時、安國寺の本堂の裏に住んでいて、毎日のように安國寺のお手伝いをしていた

さんは、真哉上人の思い出をこう語る。

「とてもおとなしい子でした。お姉さんの君子さんは私より三歳下でしたけど、とても活発でしっかりしていて、よく遊びました。真哉さんは五歳下で男の子でしたから、一緒に遊ぶというよりは面倒を見た、という感じです。」

今は嫁ぎ先の長寿院で家庭菜園を楽しみにしている

さんだが、中島家が高崎から梅窓院に引越してからも、よく遊びに来ていたという。

その　さんに中島家の歴代住職の印象を聞いてみた。

真孝上人が養子に入った倉常寺の中島霊真上人は、

「面白い方で、冗談もよく言われました。料理もお上手でしたし、お花やお茶もたしなまれた先生でした。」

中島真孝上人の印象は、

「いつも大きな声で話されて、どこにいるかすぐわかりました(笑)。身の回りをいつもキチンとされていたのを覚えています。」

真哉上人は前述の通りで、現住職の真成上人は、

「昨年の春、わざわざお寺に立ち寄って下さり、初めてお顔を拝見しました。真孝先生そっくりで驚きました。」

さて、真哉上人が十歳になった昭和七年、父真孝上人が梅窓院の住職となった。

梅窓院での真孝上人の足跡はすでにこの連載で述べたが、その体の大きさも手伝ってか、その印象は強く、いまでも古くからの檀家さんの記憶に残っている。

そうした真孝上人の後を継いだ真哉上人は海軍時代に広島で被爆し、病弱の身の上に、豪放磊落な先代の後と、やりにくかったことは確かなようである。

そんな真哉上人は父であり、先代住職だった真孝上人が遷化した四十九年に第二十四世として梅窓院の法灯を継ぎ住職になったが、それ以前の四十五年前後に作った一つの会がある。真哉上人の思いのこもった会である。

その名を梅真会という。

梅真会の梅は梅窓院から、そして真は真哉からとった梅窓院の新住職を中心にした、梅窓院の寮にいた僧侶の集まりである。

もともと梅窓院の寮は増上寺にあった学寮、慈忍室の流れを汲み、明治六年に作られている。その寮の若いお坊さんたちを、真哉上人がまとめる形で会を発足させたのだ。

手許にある梅真会の最新名簿をめくってみると、三十一人の名前が並んでいる。その名簿に並ぶお坊さんの出身のお寺は、北は北海道から南は九州と全国に広がっている。

梅窓院に集ったお坊さんたちの多くは、大正大学へ通うため上京、梅窓院に寝泊りをし、お寺のお手伝いをする。また、修行を兼ねての研修のケースもある。長い人だと十年近く、短くても一、二年はお世話になっているようだ。

この梅真会の会員でもあり、現在は梅窓院の副住職の藁谷上人はこう説明してくれた。

「真哉新住職を囲む形で発足し、多くのお坊さんが会員になりました。穏やかな人柄の面倒見のいい住職でした。楽しむ時は楽しむ、やるべき時はやろうが口癖でした。」

空気エンマとあだ名された真孝上人の後を、真哉上人はこうした自分なりのスタイルで継いでいったのである。

（ルポライター　真山剛）

高崎の安國寺当時から梅窓院に出入りしていた　さん。中島家のことは今も良く憶えている。また　さんは群馬県新田の浄土宗寺院、長寿院にお嫁入りし、その息子さんも梅真会の会員になっている。

浅草　　さん

お墓からその先祖がわかって、家系図を完成することができた尾張徳川家の武士の子孫、　さんを東京の下町、浅草に訪ねた。

先祖がわかったことで、自分がいまここに生きている縁をより強く感じましたね　さん。

自宅玄関前で奥様の　さんと。

「その人は海上自衛隊の前身機関で情報関係の仕事をされていたということでしたが、突然家に来られて、青山梅窓院にあるお墓から、『家の先祖が水野正信という立派な武士ですよ』と教えてくれたのです。」

あまりに唐突なことはいえ、自分の先祖がわかった時の喜びを、梅窓院の古くからの檀家である　さんは、心もち興奮しながら話してくれた。

「いや、何で私のようなところが、梅窓院さんの墓地の中でもいい所にお墓があるのか、ずっと不思議だったのです。でも、この方のお話から少し納得できました。」

きれいな文字で記された、六代続く家系図には、明治生まれ以後の当主の本籍や居住地までが併記されている。

この家系図が完成し、自分の先祖が江戸時代まで正確に遡れた時、　さんは何とも言えぬ満足感と使命感を感じたという。

さて、その　家の先祖は水野正信という江戸時代の武士で、尾張藩主、徳川慶勝に仕え一生をおくった人だった。そして、その大半を江戸末期の世相を綴った『青窓紀聞』の著述にあてていたようで、この大著を始め多くの著書は名古屋市の徳川記念館内、蓬左文庫に保存される貴重な資料となっている。

また、その子の輝隅は五稜郭築城の武田斐三郎に函館諸術調所で英語や数学、測量などを習い、ロシアへも渡っている。維新後は海軍兵学校で教鞭を取り、また後に名門となる攻玉社という学校の創設に参画し、教壇に立つなど、幕末から維新にかけて大いに活躍した知識人であった。

　さんはこの輝隅さんのひ孫にあたる。

「ご先祖はとても立派な方のようで、その子孫としてはやはり、嬉しいものがありますね。」

そう言う　さんは、父　さんが開いたおもちゃ屋さんを継いだ。よその店での丁稚奉公などをしてから受け継いだ店では、昭和四十年代の好景気なども経験したものの、最近の少子化や電子ゲームの流行などもあり、将来を考え同居している長男の　さんには家業を継がせることなく三年前にお店を閉めた。

そして今は三社祭りを楽しみにする悠悠自適の毎日。とはいっても長女　さんに三人、次女　さんに三人、長男　さんにも三人と、小学校五年生を上に一年づつ幼稚園の年中まで七人、そして三歳、一歳と合計九人のお孫さんに囲まれ、賑やかな毎日を過ごしている。

こうしたお孫さんの世話とともにもう一つ、　さんの楽しみがある。

芝学園での野球の指導だ。週に五日、中学一年生と二年生にボランティアで教えているそうだが、　さん自身も芝学園の硬式野球部出身で、五十回生にあたる。

芝学園在籍当時は梅窓院の先々代、中島真孝住職が芝学園の校長の頃で、週に一回、仏教の話を聞いていたという。

「真孝先生の思い出は合掌の仕方です。指の合わせ方、そして眼は半眼、鼻頭をみるように、という指導をよく覚えています。」

合掌といえば、次女の　さんが　さんのお母さんと同居していたこともあり、お孫さんは毎日おばあちゃんと一緒に仏壇にお参りしていたという。

そのお母さんは一昨年亡くなられ、今は仏壇が　さんの家に安置されている。

「次女のところの孫は、習慣になっているのですね、家に来ると必ず仏壇に手を合わせています。こっちは仕事に追われる毎日で、ゆっくり手も合わせていませんでしたから、これからは孫をみならわなくちゃ。(笑)」

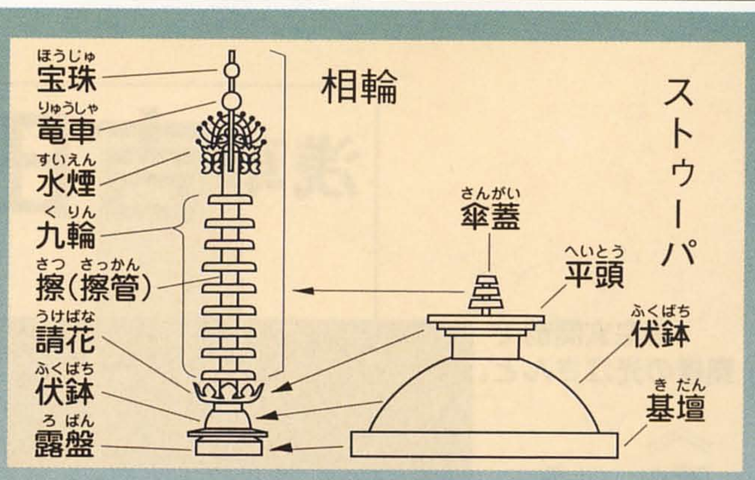
いつの日かお孫さんに野球の指導をする日が来るのを楽しみにしている　さんです。

母校の芝学園で野球の指導をする　さん。

ご先祖を調べるのが楽しみな　さん。ズラリ並んだ資料からもその熱心さがうかがえる。

境内散策

最勝寶塔



皆さまがお墓参りで、墓中央の道を進まれると、青空に生える金色の相輪と緑青色の屋根が美しい仏塔が左手に建っているのに気づかれていますでしょうか。

この塔は「最勝寶塔」といい、先代の中島真哉住職が、梅窓院にご縁のある諸霊を供養する為に発案し、その後を現中島真成住職が継いで、平成四年に完成しました。この名称は先代の御戒名「最勝寶院」に由来します。

宝塔は現在、石造りのものが多数ありますが、当院の最勝寶塔のように、軒下に豪壮でこれだけ数多い木造組物を取り入れた宝塔はあまり例をみません。この塔は、「私達は多くのご縁によって生かされている」という思いを皆さまにお持ち頂くことを意図し、造られたものです。

さて、仏塔について説明致しますと、五重の塔や三重の塔といったものを多重塔といい、屋根が二層ある塔を多宝塔、屋根が一層であるものを宝塔といいます。

塔の起源は古代インドで、釈迦の没後その遺骨すなわち「仏舎利」を納める施設に始まり、釈迦の墳墓の標として建てられ、元来「この偉大なる人を崇めよ」というのが仏塔の最初の意味で、古代インドの言語のサンスクリット語で、「ストゥーパ(stupa)」と呼ばれました。塔の語源も同じこのストゥーパにあり、その語が中国で、「卒都婆」あるいは「卒塔婆」の文字に訳され、さらに「塔婆」となり、後に「塔」と称されるようになったのです。

ストゥーパは、古墳に似た饅頭型の山の上に、貴人を示す傘の形をした相輪を立てたものがその原型で、それが中国へ入り、楼閣建築と結びつき、百済を経て仏教と共に飛鳥時代の日本に伝わりました。

その後、信仰の対象というよりは、シンボル的かつ装飾的色彩が濃くなってゆき、塔頂に掲げられた相輪だけが、仏塔の本質を象徴するものになっていきます。(右上イラスト参照)

さて、当院の最勝寶塔は墓地中央、東屋の前に位置し、植栽や石灯籠に囲まれ、四季の移ろいとともに周囲と調和し、風格のある美しい姿を見せています。塔の内部は、上部正面に本尊「阿弥陀如来」像を安置し、地下は納骨堂になっています。納骨堂は、本尊の真下に位置する中央部分には合祀カロートがあり、その周囲に納骨壇があります。

今日の社会現象として、少子化、シングル志向が強まる傾向があります。それとともに檀家内外より最勝寶塔への納骨を相談される方も増えております。そのことに対応するべく、当院においても、最勝寶塔を現在整備しているところです。

お気軽にご相談下さい。

青山散歩道

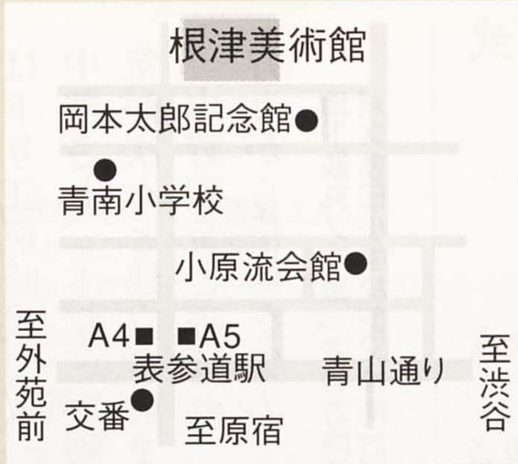
根津美術館

表参道から徒歩八分。根津美術館は昭和十五年に創立されました。東洋古美術を全般に、初代根津嘉一郎翁が収集したコレクションや寄贈品は、およそ七千点にも及びます。

美術品のなかでも特に優れているのが茶道具と仏教美術。中国商周時代の青銅器も、世界的に著名な蔵品として有名です。

また、美術館の後に立ち寄りたいのは四つの茶室が配された広大な庭園。ここはもともと大名の下屋敷で、創立者が自邸として入手したもの。

都心とは思えない緑豊かな庭園は、散策する人の心を穏やかにしてくれます。



根津美術館

国宝 鶉図（うずらず）／南宋時代

◆展示のご案内◆
平成15年1月10日（金）
～2月23日（日）
華やぎのかたち
— 草花の意匠 —
特別展示 国宝鶉図
（1月10日～2月2日）
TEL 03-5777-8600
（NTTハローダイヤル）
港区南青山6-5-1
開館時間　9:30～16:30
（入館は16:00まで）
休館日　月曜（月曜祝休日の場合は翌日）・展示替期間
入館料　一般 1,000円・学生 700円（庭園入園料を含む）
交通　銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道」下車。A5出口より徒歩8分。
http://www.nezu-muse.or.jp/

美術館のエントランス。手前に見える敷石は、かつて梅窓院の山門で使われていたもの。

色絵寿字独楽形鉢（いろえことぶきじこまがたはち）／江戸時代

普光庵（ふこうあん）から一枝窓（いっしそう）へ

移築された茶室を訪ねて

本堂再建に伴い、梅窓院から武蔵野宇田川邸へ移築された茶室・一枝窓を訪ねました。

露地門へと続く入口は、内露地への導線となっている。

「茶席を演出するもの。それは茶室ひとつでは成り立ちません。」

この移設で縁を取り持った梅窓院出入りの庭師、風間宗景氏はこう語ります。

「露地門をくぐり、庭園の木々を眺め、茶室に入る。それぞれが調和し合って一つの景色が出来上がるのです。」

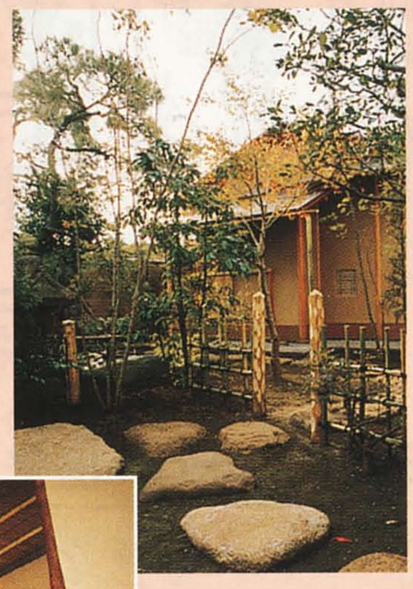
茶室と共に移設された露地門、腰掛、築地塀が、どこか昔の面影を残した風景にさせています。

梅窓院から始まり、移築に携わる職人さん達の縁を経て、武蔵野宇田川邸で生まれ変わった一枝窓。普光庵から名を変えて、ここでも深く人々の心に潤いを与えています。

当時のままの姿で残る腰掛。右奥には露地塀が見える。

茶庭中央の蹲踞（つくばい）と灯篭。

一枝窓外観。
再建は棟梁・安藤琤氏によるもの。三十年前普光庵を建築したご本人でもある。



普光庵の床柱が使われた床の間。一枝窓の名前には「梅窓院から頂いた一枝」との意味が込められている。

江戸三十三観音 札所めぐり 第六回

浅草から目黒まで、ぐるり東京一周
江戸観音札所巡りの旅。
今回は新宿区を中心に廻ります。
三ヶ寺とも独特の静寂さをもった
落ち着いた雰囲気で、
ここが都心であることを忘れさせてくれます。

第十七番 如意輪山 寶福寺

札所本尊 如意輪観自在菩薩

中野方南町の住宅街に建つ真言宗寶福寺。その歴史は古く、聖徳太子が諸国巡遊した際、この地にお堂を建立し観音像を安奉したことに由来すると伝えられています。時代は下り江戸時代に入ってから中興され、本堂・客殿・観音堂が次々と建立されました。

中野観音と呼ばれ、遠近の方々から信仰を集めています。

地下鉄丸ノ内線・中野方南町より京王バス多田小学校前又は南台三丁目下車

第十六番 医光山長寿院 安養寺

札所本尊 十一面観世音菩薩

天台宗安養寺は平安時代、慈覚大師円仁の創建と伝えられ、現在では神楽坂を上りきった所に建っています。やさしい表情の本尊・薬師如来像は、約二メートル程の坐像で江戸時代より厄除薬師として篤く信仰されてきました。

観世音菩薩像は比叡山より勧請された霊仏で、出世開運の観音様としても有名です。

JR・南北線・有楽町線飯田橋下車／地下鉄東西線神楽坂より徒歩七分／大江戸線牛込神楽坂より徒歩二分

第十八番 金鶏山 真成院

本尊 潮干十一面観音菩薩

新宿通りから寺院の立ち並ぶ円通寺坂を下った先に建つ高野山真言宗真成院。ここの潮干観音は、もともと越後の村上義清の守り本尊でしたが大阪夏の陣（一六一五）の際、このお寺に匿（かくま）われた縁で納められました。

現在は癌等難病の駆け込み祈祷寺として大変信仰を集めています。毎月第一日曜日、特に一・五・九月十八日の観音会には読経、法話の会が開催され、多くの信徒が集まります。

JR・地下鉄丸ノ内線・南北線四谷より徒歩七分

札所巡りこぼれ話 弐

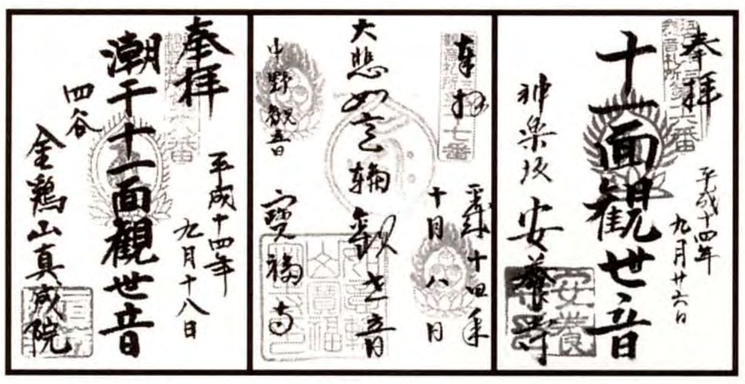
札所のご縁

お寺を廻っていると様々な出会いがあるものです。

一昨年の秋。六番清水観音堂を訪ねた時、札所巡りをしているある方と知り合いました。その場は何もなく別れましたが、その数ヵ月後、偶然にも札所巡りに来た梅窓院で再会。覚えていて下さったことから、以来『青山』を通じてのお付き合いが続いていました。

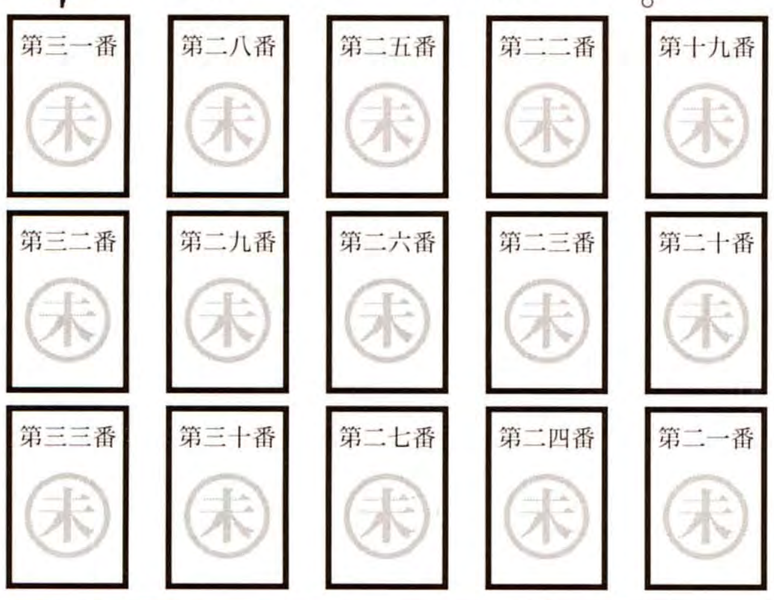
先日、その方から無事結願を果たしたとのお手紙を頂きました。毎回青山を愛読しているとの感想も添えられており、編集部一同、大変感激した次第です。お寺めぐりがご縁で、人と人との輪が広がっていくのは素敵な事ですね。

（編）



第十六番 安養寺　第十七番 寶福寺　第十八番 真成院

江戸三十三観音御朱印



◇読者の広場◇

・雨の日のお参りは足元が泥で汚れて困ります。早急な対策をお願いします。

（港区 Aさん）

只今墓苑整備中の為、工事区域の皆さまには大変ご迷惑をお掛けしております。そこで当院では墓参用長靴をご用意致しました。降雨時に東屋に出してございます。どうぞご利用下さい。

◇◆◇

「読者の広場」では皆さまからの「声」を大募集しております。梅窓院へのご意見や仏教教義のご質問、広報誌『青山』へのご感想など、ぜひお聞かせ下さい。誌面にてご紹介させて頂きます。

同時に、「梅窓院を囲む人々」では出演者も募集しております。自薦他薦は問いません。お寺に対する思いを語ってみませんか？皆さまのご応募をお待ちしております。

〒一〇七―〇〇六二
港区南青山二―二六―三八
梅窓院『青山』編集部 宛

食は命なり

第九回

食養研究家
武 鈴子

寒い冬はやっぱり鍋料理

寒い冬、体が喜ぶ食べ物といえば、やっぱり鍋料理でしょう。鍋料理はお惣菜の主菜、副菜、汁物が一つの鍋に揃い、普段不足しがちな野菜をたっぷり摂ることができます。また、海のもの、山のもの、野のものが溶け合っているので栄養のバランスがよく、しかも低カロリーなのでダイエット、生活習慣病には最高の食べ物です。一つの鍋を囲んで会話もはずみ、一家団欒にも一役買います。今回は旬の魚介類、野菜、きのこ類に、畑の肉といわれる大豆のエキス豆乳を鍋に加えた豆乳鍋です。

【豆乳鍋】

材料／鮭４切、帆立貝４個、えび大４尾、白菜１／４個、春菊１束、ねぎ２本、椎茸４枚、舞茸１パック、だし汁４カップ、豆乳２～３カップ、酒大さじ２、白味噌大さじ３～４。(だし汁を多めにしておくと後で雑炊ができる。調味料は適宜加減するとよい。)

作り方

①鮭は食べよい大きさに切り分ける。帆立貝は殻つきの場合は殻から外して洗う。えびは背わたを取る。

②白菜はザク切りにする。春菊は塩を落とした熱湯でサッとゆでて冷水に入れ、水切りして４cm長さに切る。ねぎは斜めに切る。

③鍋にだし汁、酒、味噌を入れて火にかけ、煮立ってきたら魚介類、きのこを先に入れ、次いで野菜を加える。

★鍋の具を食べ終わったら、残りの汁にご飯を加えて雑炊を作り、小口切りのねぎをたっぷり添えて食べる。

仏教研究所だより

念仏のあとの挨拶でお檀家さんに新本堂の経過報告をする中島住職。

梅窓院での法話は初めての豊嶋上人。時には笑い声が飛び交う場面も。

法話後の茶話会は、僧侶とお檀家さんの語らいのひととき。

念仏と法話の会

十月二十九日　仮本堂にて

講師　宮城教区
往生寺住職 豊嶋 瑞俊上人

◆◆◆

法話「念仏と幸せ」についてお話して頂きました。次回は善龍寺住職の向山瑞成上人にお越し頂きます。どうぞお楽しみに。

青山俳壇

選者・『俳句朝日』顧問　**大崎 紀夫**

コスモス／名月

◎特選
高原に一陣の風秋桜
(評) 一陣の風が吹いたとき、コスモスがさわっと揺れる。その一瞬をとらえた佳句。

◎佳作
名月を仰ぐ人らの影もてり
露天湯に名月揺れてをりにけり
コスモスの咲きほこる道ひた走る
月今宵曲は第九交響曲
赤白と風に波打つ秋桜
名月に身をさらしゐる槍ヶ岳
コスモスの色を違えて揺れにけり

◎選者詠
終点の駅も無人の秋桜

大崎 紀夫

〈ワンポイントアドバイス〉
「古池や蛙飛びこむ水の音」のように上五で切れ字の「や」を使った場合、下七の最後は名詞で止めるか、動詞で止めるときは終止形か連用形で止めます。

「やぶれ傘」会員募集
青山俳壇の選者、大崎紀夫先生による俳句の会です。ご興味のある方は、左記の番号までご連絡ください。
※ウエップ編集室
電話〇三(五三六八)一八七〇

投句募集

次回のテーマは「初明」「かがみもち」です。1月15日を締切、3月上旬発送の『春彼岸号』にて発表させて頂きます。住所、氏名、年齢をお書き添えの上、ご応募下さい。お待ちしております。
※港区南青山2-26-38
梅窓院
「青山俳壇」投句募集係

・行・事・報・告・

教化活動支援として各寺へ木魚を寄贈致しました。

南米・北米 浄土宗寺院参拝

八月二十三日～九月四日

浄土宗における「ブラジル開教五十周年」を来年に控え、祐天寺、傳通院、梅窓院の三か寺合同による参拝の旅が実施されました。

訪問した各寺院では、参拝のほか施設や開教状況を見学。また、サンパウロ市郊外に新たに建立されるイビウーナ日伯寺を視察するなど、現地の開教使や日系人の方々と親交を深めました。

秋彼岸寄席

九月二十三日 仮本堂にて

恒例となりました彼岸寄席。今回は春雨や雷蔵師匠にお越し頂きました。古典落語に精通している師匠の一席は、集まったお檀家さまにも大変好評で、会場は何度も大きな笑いに包まれました。

特技のオカリナが今年も登場。

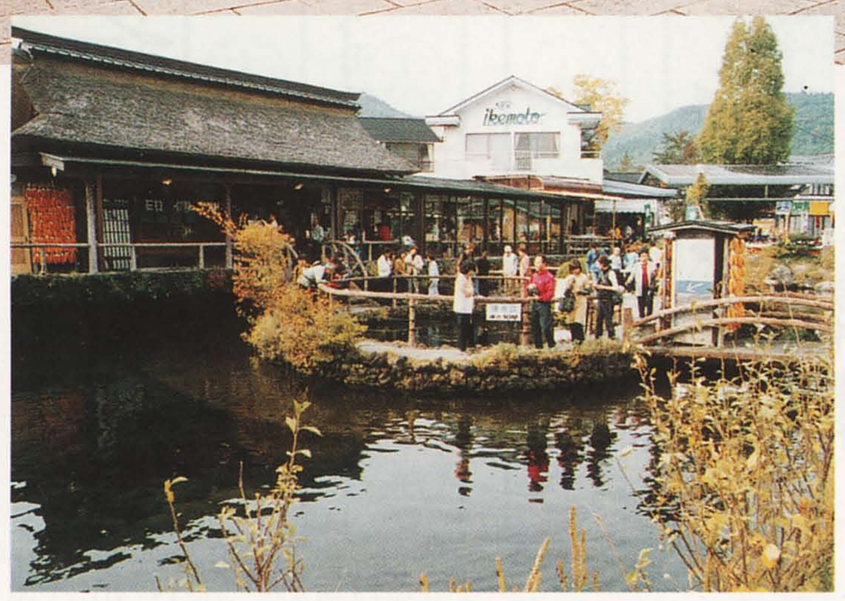
西方寺 日帰り団体参拝

十月十九日 開催

今年は山梨県富士吉田の西方寺に参拝し忍野八海を訪ねました。西方寺は大本山増上寺との縁も深く、様々な言い伝えが残る歴史ある名刹です。

今回は総勢五十名近い参加があり、大変賑やかかつ和やかな旅行となりました。お檀家さまからも「楽しかった」とのお声を頂戴しました。今後も多くの皆さまにお楽しみ頂ける団参を企画して行きますので、ご参加お待ちしております。

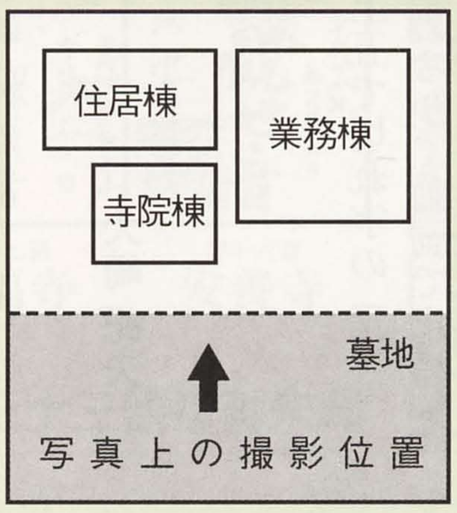
戦時中は増上寺の黒本尊が疎開していたという西方寺。



忍野の池は全国名水百選にも選ばれた名水。美しい風景が広がります。

◆梅窓院だより◆ 復興事業新着情報

新本堂建設地（十一月五日墓地より撮影）左手手前は寺院棟、奥は住居棟。右手には業務棟が建つ。



来寺される皆様へ

○工事中の為、只今駐車場はありません。車での来寺はご遠慮下さい。
○墓地にガラス等の割物を置くのは大変危険ですのでおやめ下さい。
○降雨時の墓参用に長靴をご用意しました。東屋でお履き替え下さい。